

第7回（2023）NUFS&NUAS 読書コメント大賞・一般投票

投票期間：11/20（月）～11/26（日）

一番「いいね！」と思ったコメントを教えてください。

投票フォーム：<https://forms.gle/JSEssgbQN3zh4DoU8>



NO. 書名 著者名 出版者	コメント
【1】 かわいそうだね？ 綿矢りさ 文藝春秋	私が読んだ綿矢りささんの『かわいそうだね?』という本は、私に1人大切な友達が増えたような、いやもしかしたらこれは私の分身なのか、と読みながらそう思わせてくれるようなものでした。人を愛している時の己の醜さと葛藤があまりにも綺麗に文字化され、そのまま文中に書き表されていることに恥ずかしくなってしまうほどです。けれど、この醜くて綺麗ではないものこそ恋愛であり、自分の醜さが湧き出せばしまえばしまうほどそれは本気の恋だったのだとこの本は私達を肯定してくれます。自分の醜さと対峙することは出来れば避けたいと皆が思うことですが、もしその醜さがむしろ美しさの結晶だったと知れば、これから先の自分への向き合い方が変わるとは思いませんか。
【2】 レニングラード封鎖 ： 飢餓と非情の都市1941-44 マイケル・ジョーンズ 白水社	レニングラード、革命の発祥地としてその偉大な革命家の名を冠したこの街は、1941年の独ソ開戦によって地上の地獄と化した。国境から刻々と迫りくる戦火の恐怖は、瞬く間にこの古都を「陸の孤島」へと変貌させてしまった。独ソ戦はヒトラーにより「絶滅戦争」と定義されたが、彼の地ほどこれを体現する場所はなかったであろう。爆撃、極寒、飢餓そして疫病。人々は家具で暖を取り、革靴を食み、人肉に手を出した。誰もが絶望した。しかし、希望はついに絶たれなかった。ある者は自らのパンを与え、ある者は舞台に演じ、ある者は曲を描いた。人々は人としての戦いを全うしていた。良心と文化を誇り、人々を鼓舞する使命に殉じる。劇の幕間に力尽きた役者を嘲笑う者はいない。本書は、戦争において銃を握らなかった人々の戦いの記録である。極限環境における絶望とそれに抗う人々の姿は驚嘆と感動の連続である。
【3】 残像に口紅を 筒井康隆 中央公論新社	章を重ねるごとに消えていく言葉と、人や物。 この小説では、はじめから「あ」という文字が存在しませんでした。それから徐々に、五十音のいずれかの音がランダムで消え、その音を含む人や物、そして記憶も同時に消滅します。この小説が悲しいのは、消えたという事実は確かに認識できるのに、何が消えたかは思い出せず、残像だけがうっすらと残るところです。 私は特に、主人公の妻が主人公を呼ぶ時に、「もしもし」と声を掛けていた違和感が印象的でした。慣れ親しんだ優しい呼びかけの言葉は、もうこの世にないのです。 失ったものは忘れ、残ったものにすがりつく、この小説は虚構ですが、現実的でもあると感じました。 重要なコミュニケーションツールである言葉を制限された主人公が、様々な言い換えを駆使して生活をする。終盤、どのように物語を完結させるのか、主人公の挑戦から目が離せません。 皆さん、最後に消える文字は何だと思いませんか？

<p>【4】</p> <p>こころ</p> <p>夏目漱石</p> <p>角川書店</p>	<p>愛とはなんだろう。明確な答えは誰にどう聞いたって分からないと思う。私から先生へ、先生からお嬢さんへ、お嬢さんからKへ、そして、Kから先生へ。それぞれの形は違えどその全ては愛情だった。曲がり曲がって歪んでしまっても尚、そこには純粋な愛が確実に存在するのだ。</p> <p>この『こころ』は、深い愛を持った人間がその愛の代償を抱え苦しみながらも生きるさまをありありと表現した作品である。これを読みおえる頃にはきっと、冷たくどろどろとした愛があなたの心を厚く覆うだろう。</p> <p>愛憎という言葉があるように愛と憎しみは重なる。寧ろ、憎しみを持つ愛こそが純粋なものだと感じるほどだ。愛について考えたくなつたあなたに、ぜひ読んでほしい一冊である。</p>
<p>【5】</p> <p>水中の哲学者たち</p> <p>永井玲衣</p> <p>晶文社</p>	<p>人は思考することで強くなるのだろうか。</p> <p>考えることで、知性が身につく、強靱な思考力が手に入るのだろうか。</p> <p>考えれば考えるほど、一人ぼっちになるときがある。</p> <p>ひとりよがりな強靱な思考は、他者を踏み入らせないほどの力を持ってしまう。</p> <p>みんなで集まって思考する、哲学対話という試み。</p> <p>著者の語りのなかでの哲学対話は意外なほど、ゆるやかに進んでいる。</p> <p>むずかしい言葉は使われておらず、みんなで話し合える場所。</p> <p>でもそれは生暖かいことではない。</p> <p>私の考えが誰かによって崩されてしまうとき、弱くなって、不安になる。</p> <p>なにかを守ろうとしてひとりぼっちになること、誰かに伝わったり、伝えてもらって嬉しくなること、対話には怖さと喜びが共存してある。</p> <p>その厳しさのなかに、身を置くこと、そのなかでみえてくること。</p> <p>そこに「私」や「あなた」がいることに意味がある。</p> <p>そういう場所のなかで私は迷い続けたい。</p> <p>私がひろがっていくことを受け入れたい。</p>
<p>【6】</p> <p>真夜中の動物園</p> <p>ソーニャ・ハートネット</p> <p>主婦の友社</p>	<p>戦火を逃れたきょうだいが辿り着いたのは、「真夜中の動物園」だった。さまよい歩くロマのきょうだいはさびれた動物園に辿り着く。そこで出会った動物たちと会話をする。動物と話すだなんてファンタジーで、子どもが読む本じゃあないか！このあらすじを読んであなたはそう思ったかもしれない。しかし、この本は戦争の悲惨さ、そして人間の残酷さを炙り出す。虐げられた者たちの声が聞こえる。なぜ無実の者が踏みにじられるのか。そういった疑問がわいてくる。私は考える。あなたは考える。なぜ戦争は起こるのか。なぜ戦争でなければならぬのか。そして物語は進む。最後に、彼らは解放される。それが何を意味するのか。救いなのか。あるいは絶望なのか。ぜひあなたに考えて欲しい。不安定な社会情勢の中、戦争とはどんな形をしているものなのか。これを考えることはあなたにとってなにかの糧になるかもしれない。</p>

<p>【7】</p> <p>夏物語</p> <p>川上未映子</p> <p>文藝春秋</p>	<p>若者は皆何者かになりたいと渴望し、自分が特別になれる何かを手に入れようともがく。その欲望を手っ取り早く叶える方法がある。親になることだ。</p> <p>自分がいなければ生きることのできない命。子どもにとって親となった自分は間違いなく特別な存在だ。しかし、子どもという命を介在させることで自分が成り立つという感覚、それは合っているのか。必要とされているのは親としての自分で、私が満たされるという切望が叶うことはあるのか。何が人を親にするのか。死というものは取り返しのつかないものの代表と言えるが、生まれてくることもきっと同じくらい取り返しのつかないことなのだ。</p> <p>当たり前とされている営為に疑問を持った私を救ってくれたこの本には、人間が生まれて、生きて、いなくなることのすべてが有る。その苦悶や感動もすべて。何者にもなれずもがきながら生きる、どこかの貴方へこの本の言葉たちが届きますように。</p>
<p>【8】</p> <p>生命式</p> <p>村田沙耶香</p> <p>河出書房新社</p>	<p>「普通って何だろう。」こんな問いかけが常に頭の中をよぎる作品である。この本は12篇の短編小説からなる。この12篇の小説に共通することは「社会における『普通』とは何か」である。社会における常識とは常に時代背景によって変化し続けるものであり、ある時代では「異常」だったものが「常識」になり、またその逆もある。このような社会の変動する常識・普通に当てはまらない「異常」に当てはまる人々は、自らを貫くよりかは、妥協をして普通の人に擬態している人が多いのではないか。この小説の登場人物は異常であるが、彼らはそんな自分自身を理解し肯定しながらも、社会で生きていくために普通を受け入れながら生きている。彼らの生き方から、「こんな自分でも大丈夫」「こんな自分でも良い」と思える人も多いのではないかと感じる。今の社会で生きづらさを感じている人には是非読んでもらいたい一冊である。</p>
<p>【9】</p> <p>赤い高粱</p> <p>莫言</p> <p>岩波書店</p>	<p>私は思った。「作品の世界にのめり込む」とはまさに『赤い高粱』のような小説のことである、と。この小説では高粱畑が広がる中国山東省高密県東北郷に住む一家の物語が描かれている。作者莫言は、そこで人の営みや殺戮、生と死を魔術的に表現しており、その非現実的な出来事があたかも自身の「実体験」として存在したことを疑わせない。この物語を通して私が感じたのは、単なる反日感情の扇動ではなく、「戦争」という状況下での人間の残酷さ、そして、その状況下で私たちがとるべき行動は何かという問いかけである。世界各地の「戦争」の話題が再び持ち上がる今日、私たちに求められる行動は「相手の気持ちに寄り添う」ことだろう。しかし、メディアを通して戦争を「間接的」にしか見ていない私たちが実際にその恐怖や残酷さを実感することは難しい。ならばいつそこの機に莫言が描いた世界にのめり込み、広い高粱畑に埋もれてみるのも悪くはない。</p>
<p>【10】</p> <p>風神の手</p> <p>道尾秀介</p> <p>朝日新聞出版</p>	<p>—人生は全くもって予測不可能である—</p> <p>風が吹けば桶屋が儲かるという諺があるように、たったひとつの出来事が様々な事象に影響を与える。普段と異なる時間に登校したり、行ったことのない店に入ってみたり、友達との会話に嘘を交えてしまったりと、日常の様々な場面で「風」が吹いている。それは、陽気な春の風かもしれないし、木々を激しく揺らす嵐かもしれない。この本を読むと、読者はたちまち自分自身の日常に、新しい視点を持つだろう。昨日と同じような日常が変わり、目の前には新しい風景が広がる。普段あまり関わらない人と会話すると、案外馬が合うかもしれない。手元のスマホの電源を切って、本を開いてみるのもいいだろう。新しい出会いや発見を通して日々の変化を噛みしめる。本には豊かな人生を歩むための追い風になる力があると思う。そんな風に乗って過ごす毎日が、私は楽しくて仕方がない。</p> <p>—一次はどんな風が吹くのだろうか—</p>

<p>【11】</p> <p>中東：混迷の本当の理由 (池上彰の世界の見方)</p> <p>池上彰</p> <p>小学館</p>	<p>一人暮らしの私の家にはテレビがない。新聞も取っていない。</p> <p>イスラム組織ハマスがイスラエルへの攻撃を開始したと知ったのは、事件から1週間後だった。いかに情報から隔絶された生活をしているのか気づかされる。パレスチナ問題、ガザ地区、ジハード、、、世界史の授業で学んだ言葉は、今、現在進行形となって、悲惨な映像とともに海を渡って来る。しかし、いまいちピンと来ない。自身の無知に恐怖を抱き、この本を手を取った。</p> <p>本書は、2000年以上の歴史を遡り、イスラム教の思想から現在の対立の原因までを分かりやすく紐解く。それは、中東のみならず、世界の国々・人々の思惑が複雑に絡まって捻れた結果であった。</p> <p>「無関心でいることがいちばん怖いのです。」</p> <p>閉鎖的で内向きな情報空間では薄れゆく、自分と世界とのつながりの意識。対岸の火事だと決め込んでいたら、飛んでくる火の粉に気づけない。まずは、知ることから。</p>
<p>【12】</p> <p>暇と退屈の倫理学</p> <p>國分功一郎</p> <p>新潮社</p>	<p>金木犀の香りを嗅ぐために遠回りする。100円セールで対象外のドーナツを買う。私はこういう、無意味を大切にしている心意気を大切にしていますが、本書の著者國分先生もこう言います。</p> <p>“人はパンがなければ生きていけない。しかし、パンだけで生きるべきでもない。私たちはパンだけでなく、バラも求めよう。生きることはバラで飾られなければならない。”</p> <p>本書では退屈をメインゲストに、生きることの本質を哲学者たちが教えてくれます。人類が誕生して700万年。先人たちは膨大な思考の積み重ねの上に今を残してくれました。学業にアルバイト、恋にSNSにオタ活にと忙しい現代の私たちにとって、退屈をどう捉えどう生きるかは普遍のテーマです。忙しい時に退屈について考える。なんて無駄。なんて優雅。スピノザ、ハイデガー、ニーチェにパスカル。偉大な哲学者たちに導かれ、“退屈の哲学”の世界に今こそ誘われてみてはいかがですか。</p>
<p>【13】</p> <p>寄生虫を守りたい</p> <p>佐々木瑞希</p> <p>dZERO</p>	<p>寄生虫と聞いてどのようなイメージを持つか当ててみせよう。</p> <p>当然ネガティブなイメージだろう。</p> <p>しかし貴方は寄生虫の魅力を知らないはずだ。</p> <p>ロイコクロリディウムという種を例に挙げて紹介しよう。</p> <p>特定の陸貝にしか寄生することが出来ず、鳥類に食べられなければ?殖することが出来ない種。そのため、食べてもらえるように陸貝の体表で昆虫の幼虫のフリをして懸命にアピールする。</p> <p>「貴方がいないと生きていけないの！貴方だけのの！」「私をどうか召し上がって！」</p> <p>といった風に健気で献身的な姿で取り入り、内側で自らの帝国を築く。</p> <p>おお寄生虫、なんというファム・ファタールか。</p> <p>本書の魅力は、多種多様な傾国の美女の解説だけでは終わらない。寄生虫の存在から、生物多様性や環境保全についても考える機会を与えるものとなっている。気持ち悪いと忌避せず、一度目を向けてみて欲しい。我々人類とて、彼女らのように、他者無しに生きられない存在なのだから。</p>